

『医療者としての原点』 ～ 座右の書 ～

2023 年 7 月 15 日午前中は、早稲田大学オープンカレッジでの講座『がんと生きる哲学』に赴いた。テキストは筆者の『がん細胞から、学んだ生き方 ～ 「ほっとけ 気にするな」のがん哲学』(へるす出版)を用いて『「がん教育」はなぜ必要か?』&『医療者としての原点』の箇所を音読しながら進めた。

午後は、『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』に出席した。『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』は、東日本大震災の 2011 年に創設準備がなされ、2012 年に当時 OCC 副理事長であった今は亡き榊原寛先生が始められた。

筆者は、ヘレン・アダムス・ケラー (Helen Adams Keller、1880-1968) について【ヘレン・ケラーは、2歳の時に高熱にかかり、聴力、視力、言葉を失い、話すことさえ出来なくなった。家庭教師として派遣されてきたのが、当時20歳のアン・サリヴァン (1866 - 1936) であった。サリヴァンはその後 約50年にも渡って、よき教師として、そして友人として、ヘレンを支えていくことになる。ヘレン・ケラーが『人生の眼』を開かれたのは『いのちの言葉』との出会いである。『I am only one, but still I am one. I cannot do everything, but still I can do something; And because I cannot do everything I will not refuse to do the something that I can do. 「私は一人の人間に過ぎないが、一人の人間ではある。何もかもできるわけではないが、何かはできる。だから、何もかもは出来なくても、出来ることを出来ないと拒みはしない」』(ヘレン・ケラー)】と紹介した。

また、先日帰郷した鶉鷺(鶉峠+鷺浦; うさぎ)についても語った。【鶉鷺小学校の卒業式の来賓の挨拶『少年よ、大志を抱け』。1887年札幌農学校のクラーク (William Smith Clark、1826 - 1886) の言葉。札幌農学校の2期生での『内村鑑三 (1861-1930) ・新渡戸稲造 (1862-1933) 』が、私の人生の機軸として導かれ、『南原繁 (1889-1974) ・矢内原忠雄 (1893-1961) 』との間接的な出会いも与えられた。英文で書かれた『武士道』(新渡戸稲造)と『代表的日本人』(内村鑑三)は、若き日からの座右の書となった。】とされげなく語った。